

閉会の辞

藤澤 令夫

評価委員

2日間にわたる「第4回公開シンポジウム」の終了にあたり、その間に感じたこと、考えたことを断片的になるかもしれませんが、幾つか申し上げて、閉会の辞ということにさせていただきたいと思えます。

「現代世界と古典学」をテーマとしたこのシンポジウムは、インド、西洋、モンゴルなどそれぞれの古典にかかわる個別的な主題の4つの研究報告と3つの講演、および、それらに共通する「古典」「古典学」ということそのことに視座を据えて、現代世界におけるその意義を問う2つの討論（パネルディスカッションと全体討議）このいわば個別的な主題と普遍的な主題の組み合わせによって、構成されていました。

このような構成のあり方は、考えてみれば、ただ毎回の公開シンポジウムのことだけでなく、そもそもわれわれの「古典学の再構築」という営為自体が、必然的にとらざるをえない形であり姿勢であると申せましょう。古典学を古典学一般として「再構築」するためには、さまざまな文明におけるそれぞれの古典を、まさに「古典」そのものへと収斂することに照準を定めなければなりません。同時にまたその作業は、中国、インド、イスラーム、日本といった各文明圏の古典についての、しっかりとした個別の研究に支えられてこそはじめて、砂上の楼閣ならぬ堅固で実質的な「構築」でありうるからです。この2日間に拝聴した個別の研究報告と講演はいずれも、そうした要請に応えるだけの高いレベルのものでありました。

他方、パネルディスカッションと全体討議のテーマはそれぞれ、「現代における古典の価値」「現代における古典学の役割」ということでしたが、ある意味で、こうした問に対する一般的な形での答ならば、あらためて言うまでもないほど明白であると、私には思われます。なぜならば、現代は、科学技術の急進と独走の

もとに、ひたすら効率と経済にのみ目を向けた価値観による大勢支配ということを顕著な特徴としています。古典は、このような大勢に対抗して、人間が人間であるための精神的諸価値の源泉となる、かけがえのない貴重な砦であることが疑いえないからであります。

しかし、一般的な答としてはそのように言えても、「現代」というものがわれわれの外に与えられた固定的な所与として、受身の姿勢で受けとめられているかぎりは、この一般的な答は、抽象的な意味しかもちえないのではないかと危惧されます。「現代」が所与であるとしても、その所与とは、われわれがそこで生きて行動していくところの所与なのであって、われわれ自身の生き方、行為のあり方そのものこそが、具体的な意味をもった「現代」であると考えなければなりません。

その意味で「現代」とは、外的な「所与」というよりも、われわれ自身が積極的に創り出していくべきものであり、「現代における古典(学)の価値・役割」を問うことは、いまこの現在における自分自身の生き方にとって「古典(学)」とは何であるのか、何を与えてくれているのかを、みずから問い確認することが芯となっていなければならないと思います。昨日のパネルディスカッションでも、「古典と現代とは個々独立に対峙するのではない」とか、「現代とは私である」「古典は現代と断絶した過去のものではない」といった発言がありましたが、私はほぼ以上のような想念に誘われながら聞いていました。

ただしそのことを、「その時代時代が現代に価値あるものとして認めたものを古典と呼びなす」とまで言ってしまいますと、例えば昨日話題に出た、「企業戦士」をはじめ多数の現代人に生きがいと勇気を与える価値ありと評判される『プレジデント』という雑誌なども、「古典」と呼ばれることになりそうです。それでもよいと言う向きもおありかもしれないけれども、やっぱりちょっと変ですね。

「古典」が現代的価値をもつとすれば、むしろそれは、長い歴史の中できびしい淘汰を経て伝承されてきた典籍であるがゆえに、おのずから、時代時代によって変遷する思潮や価値観に左右されない、恒久的な価値を指し示しているからではないでしょうか。西洋の

古典について申しますと、パピュロスに書かれた卷子本であった古代ギリシアの書物は、紀元後5世紀ごろから本格的に行なわれるようになった皮紙の冊子本(codex, 元々は「木片」の意味)への、写しかえの過程の中で、きびしく選択されて、いわゆる古典期(紀元前5,4世紀)以前の思想書や文学作品の多くがここで伝承を断ち切れ、散逸してしまいました。今日まで伝えられている「古典」は、そういうきびしい価値的な選択と淘汰を切り抜けて生き残った貴重な典籍であり、それゆえにこそまた、おのずから不易の価値を体現しているのだと考えられます。「古典」を考える場合、ただ「現代」を基準としてその価値を評価するのではなく、このような典籍としての伝承自体の重みを常に念頭に置かなければならないことは、いうまでもありません。

ただ、古いものはもちろん新しいものとは違うし、恒久的な不易の価値は、われわれがさし当って持ち合わせている価値観とは、必ずしも一致するわけではありませんから、先ほど中川久定さんも言われたように、古典とわれわれとの間には、どうしてもかなりの距離があることが必然であります。古典を学ぶことの大きな意味の一つは、われわれが自分の考え方の現状に安住することなく、古典との真剣な対話を重ねることによって、われわれと古典との間にあるそのような距離を、埋めようとする努力にあるといえましょう。

日本における外来文化の受容のあり方ということも、関連するトピックの一つです。仏教や儒教の受け入れ方には、日本独自のスタンスがあったと、うかがっていますが、特に西洋文明の受容のあり方は、先ほど触れたような現代の状況と深い関係があります。19世紀の中ごろ、日本は緊急の国力増強の必要に迫られながら、西洋の文明・学問の受容を始めましたが、その際、日本が求めていたものと、相手方である西洋の学問がちょうどそのころ現出していた状態とは、大へんよくマッチしていました。つまり、西洋の学問は19世紀の中ごろ、堅固な専門文化・細分化構造(disciplinary specialization)をとるに至っていましたから、日本は「富国強兵」「和魂洋才」の掛け声のもとに、緊急に必要な科学と技術にかかわるその先端部分だけを切り取って、摂取することに全力を挙げればよかつ

たのです。

ですから、西洋の文明・学問をその淵源以来培ってきた最基層の「魂」それがギリシア・ローマの古典なのですが、に目を向ける余裕は全くなく、夏目漱石が「皮相上滑りの開花」と呼んだ、「魂」抜きの西洋文明・西洋学問が、大勢としては、ずっと今日まで続いてきているように思えます。今ではさらに「和魂洋才」の「和魂」すらも、どこかへ消え失せてしまって、「無魂洋才」の世の中となりました。それだけに一そう、古典の研究者には、「魂」の全面忘却と金銭・効率の崇拜へひたすら向かうこのような趨勢を、少しでも阻止するためのきびしい努力が、要請されていると考えなければなりません。

最後の全体討議では、司会の中川さんが、幾つかの具体的な例を挙げながら、古典の背景にあるさまざまな民族、文明、宗教のあいだには、人の気質、習慣、考え方、信仰のゆずれない細部などに、超えがたいほどの違いがあることを指摘されて、はたしてその違いを克服し統合して新しい共通の価値観を創出し、「一般古典学」なるものを成立させることができるだろうか、という問題を提起されました。

これはたしかに難しい問題で、これを完全に解決したうえでなければ「一般古典学」はありえないのだとすれば、おそらく「新しい共通の価値観」の母胎となる厳密な意味での「一般古典学」というようなものは、永久に実現不可能と考えなければならないでしょう。しかし、互いに異質の多様な因子を字義通り統合(integration)することは、現実にはほとんど不可能であるとしても、それを共通の努力目標として堅持するならば、多様な民族・文明の多様な古典が一つの集合体(aggregation)を形づくるだけでも、「一般古典学」は十分内実をもちうるのではないかと思います。

類比的なイメージを申しますと、例えば私がよく通った大英博物館(British Museum)は、エジプト、ギリシア、ローマ、インド、中国、日本その他、さまざまな異なった文化圏における文化財・美術品の「集合体」といってよいでしょう。それらの多様な文化財・美術品は、それ自体としても、その扱い方保存、修理、展示などにおいても、それぞれの古い伝統を踏まえつつ互いに全く異なった、異質のものである

とってよく、各分野がそう容易に妥協して、「共通の」考え方や方法や美意識をもつというわけにはいかないけれども、しかしそれにもかかわらず、ミュージアム全体として見ますと、まぎれもなく、そうした多様性のゆるやかな統合が実現されていて、「大英博物館」としての単一の価値を体現した強い存在感が印象づけられます。

このようなことがつまり、会の最初の「総括班報告」(中谷)の中で言われていた、「各古典に表される人生観、世界観、美的感覚を、その多様性において認識する」ということにほかならないでしょう。「一般古典学」は、そのような「多様性の正確な認識」これがあるのとないのとでは大違いですが、その認識を踏まえてゆるやかな統合を形づくることによって、現代の混迷とした状況の中で、古典(学)でなければ果せない役割を果たすことができるのではないかと期待さ

れます。そして、そのことを少しでも効果的に実現していくためには、総合的な「古典学研究所」の設立ということが、やはり真剣に考慮されるべきでありましょう。そういったことを、今回のシンポジウム全体を通じて、あらためて強く感じた次第であります。

最後に、それぞれの研究報告と基調講演をなさってくださいました演者の方々、それから、パネルディスカッションや全体討議で司会の労をとってくださったり、パネラーとしてまたフロアから、いろいろ発言してくださった方々、そして、今回のシンポジウムを企画立案し、会議全体の進行を遺漏なく取り仕切っていただいた事務局担当の方々と中谷領域代表に、心から敬意と感謝の意を表しまして、私の閉会の辞とさせていただきます。

どうも有難うございました。

